モンハンＰ２Ｇ～駆け出しハンターの擬人化伝

牙練

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンハンＰ２Ｇ～駆け出しハンターの擬人化伝

【Ｎコード】
Ｎ４５８４Ｌ

【作者名】
牙練

【あらすじ】
駆け出しハンターと擬人化したモンスター娘達が送る笑い、涙、ハーレム、エロ（１８禁にはしません、多分）一夫多妻などなど。青年の明日は如何に！

外話　紹介（前書き）

増える度に更新。

外話　紹介

ニート＝ロダ
別名“自宅警備員ハンター”
現在のＨＲ　６
主な武器　双剣　銃
性格　温和
ハンターとしてはまだ駆け出しで、日々己を鍛えている。以外に大胆。
シャーの依頼の報酬により送られた装備品は、
サザミＺシリーズとカーマインエッジ

シギ
元モンスター名　ドスギアノス
現在のＨＲ　まだ無し
主な武器　伸縮自在の爪　氷液
性格　冷静
元ドスギアノスで、縄張り争いで負け傷ついていた所をニートに発見され、擬人化饅頭を食わされ人になった。最初はニートを殺そうとしたが、萎えてしまいニートに『意味は自分で探せ』と言われ共に行動する事にした。感情が高ぶるとテンパる。
防具装備はオデッセイ・ギアノスＵシリーズ

シャー＝サク
別名　???
現在のＨＲ　９
主な武器　双剣　銃　太刀
性格　おちゃらけ　冷静
からかったり、弄ったりするのが趣味なハンター。擬人化について

調べたり、擬人化の薬を製造したりしている。戦闘ではふざけず意外な一面を見せる。
ランクが上がった。
装備はサザミＺシリーズとカーマインエッジでニートに上げたのは新しい奴。
本名はルブ＝グラゼが本名。

デス＝シーザー
別名　死の運びや
現在のＨＲ　？？？
主な武器　太刀　大剣　ハンマー
性格　豪快
業者の運びやを営んでいる。ハンターの仕事も玉に受ける。

オババ
職業　ポッケ村村長
性格　温和
様々な依頼を新米・ベテランハンターに回す。

外話　紹介（後書き）

また増えたら更新。

外話　紹介２（前書き）

久しぶりに更新！

……テスト最悪の結果に凹む。

外話　紹介２

チャイム
元アイルー
職業　キッチンアイルー
性格　遊撃手　楽観的
元アイルーで１番の古株。ニートの“願望”を知る数少ない猫耳少女。肉が得意。

ココロ
元アイルー
職業　キッチンアイルー
性格　武器一筋　おとなしい
元アイルーで２番に料理が上手く、穀物・野菜が得意。猫耳少女。

ドナルド（注　ディズニーではない）
元アイルー
職業　キッチンアイルー
性格　爆弾一筋　過激
元アイルーで３番に料理上手で乳製品を調理する。猫耳少女。

ヒョウ
元アイルー
職業　キッチンアイルー
性格　普通　無口
元アイルーで４番に料理を作り、栄養バランスを考える。それに反して酒が得意。猫耳少女。

サイレン

元アイルー
職業　キッチンアイルー
性格　爆弾好き　特攻
元アイルーで5番に料理を爆発させる。魚介・乳製品を取り扱う。
爆発しても料理が出来るスキルを所持。猫耳少女。

クー
元アイルー
職業　オトモアイルー
性格　勇敢　温和
元アイルーでチャイムと同じ古株。チャイム同様、ニートの“願望”を知る数少ない猫耳少女。

外話　紹介２（後書き）

リハビリの出だし。
勢いに乗って食事シーンを書こうかと。

外話　擬人化道具（前書き）

こんな擬人化道具を希望したい方、どんどん書いて。

外話　擬人化道具

擬人化の条件は性別に決まる
男ハンターの場合、高確率で雌モンスターに出逢い、低確率で雄モンスターに出会う。
逆も然り。
そうなる理由は擬人化〇〇から発せられる“古龍の血”から漏れる気配、“ドキドキノコ”の香りが引きつけるからである。
強いものに頼りたい、助けてもらいたいと言う生存本能が働いているからである。

擬人化饅頭
食べると急激な眠気に襲われ眠ってしまう。（人が食うと眠る。それ以外は害は無い）
モンスターが食べると眠り、某美少女戦士の変身シーンの如く体が虹色に光る。
そして擬人化する。

外話　擬人化道具（後書き）

道具の希望募集中！

序章～かの者、後に伝説に成る～（前書き）

朝から書いているこの小説。来週テストだけど危機感０。

序章～かの者、後に伝説に成る～

雪が降り積もる山の麓の村、ポッケ村。そこにハンターとして駆け出した青年が住んで居る。
その青年はとある町から以来を受け仕事のために雪山に行ったが、ティガレックスに襲われた。
運よく村の人に助けてもらったが街の仕事場の管理人に死亡したと判断され、解雇扱いになっていた。（この村の村長、オババから聞いた）

さてどうしようと考えてた矢先、青年を助けた元ハンターがハンターをやらないかと誘われ、ハンターになることを決意する。
それから数ヶ月、彼は様々な以来をこなしついにはティガレックスを討ち取った。とは言え彼はまだ駆け出しハンター、これから先の古龍と殺りあえるかどうかは青年と作者が握っているのです。

そんな青年の日常がガラリと変わるのは仕様です。

序章～かの者、後に伝説に成る～（後書き）

まぁぼちぼち書いてきます。

1話　擬人化の噂（前書き）

法の目を掻い潜り投稿。

1話　擬人化の噂

「ふぅ、今日も沢山発掘出来たな。」

黒髪の青年がそう呟く。一般成人男性の平均身長の高さである。
この青年の名はニート＝ロダ、別名“自宅警備員ハンター”と呼ばれている。

「自宅警備員じゃねーよ。」

今日はポッケ村の村長オババに呼ばれていた。何でも知り合いの研究に協力して欲しいとの事。
報酬は１万ｚ出すと言われ受けた。

「村長、仕事は？」

「おぉ、よく来てくれたの。早速じゃが今回はこの饅頭をモンスターに食べさせてきて欲しい。」

「……何故？」

怪訝な顔で聞くと１人の男が現れた。某ホラー小説に出てくる怪人みたいな格好だ。違いは顔の表情が笑みを浮かべていることだろう。

「その説明は俺がするぜ。」

「……誰？」

「彼は最近噂になっておる擬人化について調べている研究者兼ハンターじゃ。お主より高い。」

「俺の名はシャー＝サク、ＨＲ８だ。簡単に説明するとこの饅頭が擬人化の出所か調べて欲しい。おっと自分で行けなんて言うなよ、こっちも忙しいからな。」

言いたいことを言われたので、諦めて行く事にした。

「わかった、行ってくる。」

そう言い村の出口へ向かう。

「……大丈夫じゃろうな？」

「ノープログラム、問題ない。それより頼んだよ。」

「わかっておる。アイルー達、あの家を大きく改築しとくれ！」

『了解ニャー！』

大勢のアイルーが改築にかかった。

1話　擬人化の噂（後書き）

まだ大丈夫だぜ！

2話　（二重の意味で）嵌められた（前書き）

勉強しろよと自分に言う。意味無いけど。

2話　（二重の意味で）嵌められた

ここは雪山、現在ニートが装備しているのは、足以外はレイア、足レウスと何とも中途半端な装備である。武器はブレイドエッジ改と双剣だ。

1番の洞窟前でホットドリンク飲み、6番まで移動した。

「さてと、この饅頭どのモンスターに食わせるべきか…ん？あれは…。」

ニートの少し先にドスギアノスがいた。様子を見ると何故か弱っている。

「千載一遇のチャンスってやつか。」

ニートはドスギアノスに近づく、そしてドスギアノスが気がつき臨戦態勢をとるが、まともに動けていない、それでも威嚇に口を上げる。

ニートは饅頭を口に投げ入れた。

ヒョイ！　パク！

「？……ＺＺＺ。」

「一応クエスト終了だな。」

そう安堵をつくと突然ドスギアノスの体が虹色に光る。（某美少女戦士の変身シーンの如く）

光が収まりニートが目を開けると驚愕した。何故なら全裸で肌白い美少女が寝ているからだ。（外見年齢１８歳位）

「な、なんでこんな所に女の子が……ハッ！」

一つ思い当たる節があった。シャーという男の確認の依頼。

『この饅頭が擬人化の出所か調べて欲しい』

そうだ、もし噂が本当なら擬人化しても可笑しくない。疑うべきだったっ！

「はぁ、仕方ないベースキャンプに運ぶか…。」

心が折れそうになったが、耐えた。

ドスギアノス少女の体は以外に柔らかく、理性がやばかった。

2話　（二重の意味で）嵌められた（後書き）

勉強？何それおいしいの？

3話　少女の問いと人の身勝手（前書き）

赤点なんて吹っ飛ばして～！赤点なんて吹っ飛ばして～！
俺は今日も生きるっ！

……すいません、自重します。

3話　少女の問いと人の身勝手

ベースキャンプに戻ったニートはすぐさまドスギアノス（だった）少女に毛布をかける。
その間に伝書鳩に、『クエストリタイア』の紙を括り付け飛ばした。

「う……うん……。」

それからしばらくして少女の目が開く。

「ここは……、ハッ！？お前はさっきの……！」

「起きたか、しかし随分とかわいらしい寝息で。」

「ふ、ふざけるな！私に何を食わせた！理由によっては……！」

シャッ！　少女の爪が細長いナイフの様に5本伸びる。
ニートはそれを見て驚いたが、直に冷静になり事情を説明する。

「君が食べたのは擬人化饅頭だろう。」

「…なんだその胡散臭い饅頭は？」

「簡単だ、食べたモンスターが人になるんだ。現に君と喋っていることが何よりの証拠。」

少女は自分の体を見て、驚愕の表情を浮かべる。

「なんだこれは……！貴様！元に戻せ！」

「無理。俺は依頼で来たんだ、擬人化饅頭が本物かどうかのな。」

「貴様ぁぁっ！」

シュンッ！　爪が首筋の手前で止められる。

「……何故！何故抵抗しない！お前等ハンターは私たちを狩る生き物だろっ！何故だっ！」

ニートはある意味で覚悟していた、モンスターを狩る者はろくな死に方をしないと。玉に人に恨まれる事もあるからだ、討伐が間に合わず家族を失った被害者とかに。

「私が人間だからとでも言うのか？貴様等人間はモンスターなら狩り、人なら狩らないと言うのかっ！」

「……ならお前等は、モンスター……同属なら狩らないのか？」

「っ！」

「確かに一理ある、お前の言うこともな。でもな俺達ハンターが狩りをするのは、必ずじゃないが守るためだ。そこに住んでいる人達の笑顔を守るために俺はハンターをやっているんだ。お前は守りたい仲間は居ないのか？」

言い訳に近い、いや言い訳なんだろう。そうでも言わないと潰れてしまう、自分が。だが本心でもある。

「……居ないな、仲間など。縄張り争いに負けると一斉に襲って来

たさ。」

自嘲気味に話す少女。怪我の原因はそれなのだろう

だからこそ、ニートは言葉を紡ぎ伝える、仲間の大切さを。

「なら俺がお前の仲間になってやるよ。」

「……意味が…「意味は自分で探せ。」…。」

「だからその意味が分かるまで俺が仲間に、友達になるよ。」

そう言って笑う。少女には眩しくしかし温かい笑顔に見えた。

ヒュッ！少女は爪を引っ込める。

「フンッ！殺す気も失せる。……今の言葉忘れるなよ…。」

「勿論！」

雪山にも関わらず、ベースキャンプは温かい空気だった。

3話　少女の問いと人の身勝手（後書き）

次回で少女の名前出さないと。

4話　名前を付ける、即ち存在の証（前書き）

勉強？知るか！

4話　名前を付ける、即ち存在の証

とりあえず緊迫した空気と危機は過ぎ去ったので、話題を変えることにした。

「そういえば、貴様の名は何と言うのだ？」

「俺？俺はニートって言う。」

「自宅警備員なのか！？」

「違うわ！というか何でそんな言葉知ってんだよ！」

「……群れの中に居たんだ。」

ニートは心底同情した。

「それでお前の名前は？」

「ドスギアノスと呼ばれているが……。」

「いやそんなんじゃなくて、固有名って奴。」

「無いな。いつもリーダーとか呼ばれてたからな。」

なんとも集団のリーダー臭い呼ばれ方である。いやリーダーか。

「俺が付けても良いか？」

「好きにしろ。だがまともなのにしろよ。」

「OK。……そうだな『シギ』なんてのはどうだ？」

「以外に良い名だな。気に入った、今日から私はシギだ。」

「おぅ！よろしくな、シギ！」

子供の如く笑うニート、そんなニートを見て初々しいと思うシギだった。

4話　名前を付ける、即ち存在の証（後書き）

不味い……、勉強が解らない。

5話　ポッケ村（前書き）

諦めたよ……。さすがに。

5話　ポッケ村

そんなこんなで移動用の馬車が来た。

「おう坊主！クエストリタイアしたんだと？情けねぇなぁ！」

この男、名をデス＝シーザーと言う。物騒な名前なので『死の運びや』と恐怖と畏怖のあだ名がある位だ。その名の通りの実力もあると噂。

「んで、そこのお嬢ちゃんは誰だ？……まさか攫ってきたわけじゃ……。」

「いや違うから、クエストの途中で出あったんだよ。何でも道を間違えたらしくて。」

「私は方向音痴じゃ……モガッ！「あ～まあそんな感じで、（迷った事を）認めようとしないのさ。」

「ほ～そうかい。とりあえず乗れ、詳しいことは後日にしてやる。」

「ありがと。」

馬車に乗り村に移動する。少し経ったあとシギがポッケ村について質問してきたので、掻い摘んで説明した。

・ポッケ村は雪山に囲まれた村であり、雪山の麓でもある。

・ハンターが極端に少ないのが現状。

・村から離れたところに街がある。（街名はドンドルマ）

・農場がある。

・ハンターズギルドがある。

「こんなところだな。」

「なるほど。」

そんな話をしてるとデスが声をかける。

「ついたぞー！」

ポッケ村到着。

5話　ポッケ村（後書き）

赤点がなんだー！

6話　男の正体と夢（前書き）

テスト終わった。
結果怖えぇ！

6話　男の正体と夢

「じゃあな！またよろしくな！」

「おう。」

デスは去っていった。

「余り前と居たところと変わらんな。」

シギが感想を漏らす。

「麓の村だしな。さて村長のとこ行くぞ、聞きたい事もあるし。」

1分後。

「おお、帰って来たか。」

「お帰り。どうやら成功みたいだｎ「死ねっ！」

ブオンッ！　ニートの拳がシャーに襲い掛かる！

「うぉっ！何すんだよ。」

「……1つ聞く、お前は何者だ？本当に調査しているのか？」

「いいや、正しくは『擬人化研究・調査』って所かな。」

――――どういうことだ？――――

「……それで貴様は何がやりたいのだ？私を人にしてどこかに売る気か？」

それまで黙っていたシギが言葉を紡ぐ。

「いや。……そうだね、俺はただ1人で狩りをしてるハンターと狩られる君達モンスターを助けたいだけだよ。」

「……意味が分からん。」

理解出来ないと顔に浮かべるシギ。俺にも理解出来ない。

「……俺達ハンターはある意味孤独でもあり、孤独じゃないともとれる。でもな、それでも孤独は拭いきれない。」

「モンスターもある意味で似ていて同じなんだよ、番（つがい）と集団を除くがな。もう1つ上げるとするなら、誰だって死にたくない、人もモンスターもな。だから創りたいんだ、人もモンスターが共存出来る世界をな。」

「だがそれは貴様の我侭だろ。」

「たしかにのぉ。」

オババが口を挟む。

「それでも死に逝く者を1人でも減らしたいと思うのじゃよ。モンスターに街や村を襲われ、家族を失った人達を出さんためにとの。」

オババがシャーの願望を代弁する。シャーがまた口を開く。

「モンスターも必死に生きているのは解る。でもな、通り道ではない道を通り人を襲ってしまうという事がやはり起きてしまう。捕獲するにしても何時、何が起こるか解らない。せめて人語、最悪理性があればと思い暗中模索もした。」

「そして“擬人化”か……。なんとまぁ。」

ニートはため息をつく。それは俺達の考えだろと言おうとしたが、やめた。

「あんた、狂ってるな。」

「解っている、だがそれでも譲れないんだ。」

微妙な空気が続くが、ニートは諦めた様に伝える。

「1つ約束しろ。私利私欲の為に擬人化をしようとすんなよ。シギとモンスターには悪いが。」

「まぁ色々言いたいことはあるが、目を瞑っといてやる。……下らぬことを考えなければの話だがな。」

「……ありがとう。」

そして日が暮れる。

6話　男の正体と夢（後書き）

多かったな、文章。

7話　改装された家＋α（前書き）

なんかまだ書ける気がする。

7話　改装された家＋α

とりあえずシリアスは終わったので、ふざける空気に入る。

「そうそう、お主の家改装したからの。」

オババがそう告げると、ニートの時が止まった。

「どっ、どういう事だよ！」

「お主には擬人化した娘と一緒に暮らしてもらう、因みにスポンサーはシャーじゃ。」

「がんばれ！（満面の笑顔）」

アクションの落ち込むを連続でするニート、シギはもう慣れたと諦め顔。

「……落ち込んでないで貴様の家に行くぞ。」

「……解ったよ……。」

1分後。

「……ホントに大きくなってやがる。」

人が10人居ても入れそうな家が出来ている。しかも二階建て。

「早く入るぞ。」

「あぁ、おーい帰ったぞー。」

どたどたと誰かが来る。

「ダンナさん、おかえりニャー。」

出てきたのはメイドのエプロンを着た猫耳の少女だった。

「……貴様、いくら引きこもりだからと言われているからｔ「違うし知らんわっ！というか誰！？。」

「ダンナさん僕ですよ、キッチンアイルーのチャイムですよ。」

そう告げられその少女―――チャイムを良く見る。髪の色が黒いのでチャイムと理解した。

「なんで人になってんの？」

「シャーという人がマタタビをくれたのにゃ。」

「……あの仮面か。確かにやりかねんな。」

シギが感心する。

「……他は？」

「オトモアイルーのクーとキッチンの４名、ヒョウ、ドナルド、サイレン、ココロが人になりましたにゃ。」

もはや落ち込むアクションすら出来ない。そして日が暮れた。

7話　改装された家＋α（後書き）

本当は食事まで行きたかったんですが、疲れました。

ニート「さぼんなよ。」

無理！

8話　食事風景（前書き）

さて書いてこうか。

8話　食事風景

とりあえず色々諦めたニートは家に入り食事を取ることにした。途中シギの事と擬人化の調査?を手伝う事をチャイムに説明。他のアイルー（今は人だが）に伝えると言って直に知らせに行った。

そんなこんなで食事の時間。メイド服を着た5人の猫耳少女達が料理を運んで来る。メニューは黄金米とオニマツタケ。

「ダンナさん、シギさん、どうぞですにゃ。」

「ありがとう。」

チャイムが料理を運んで来てくれた事に礼を言うシギ。一方ニートに酒が注がれる。注ぐのはヒョウ。

「……どうぞ。」

「いつもスマン。」

ニートはねぎらいの言葉をかける。

「……別に……仕事だから。」

無愛想なヒョウであった。

「なぁなぁダンナさん、シギさんと何か無かったのかい?例えば大人な事とか!」

「あっ私も聞きたい！シギさん！そこのところどうなんですか？」
ドナルドが１８禁の妄想を口に出し、サイレンが名前に反してシギに迫る。迫られたシギは思わず後ずさる。
「いや、特別何かあるわけでは無いんだが……。」
「そ、そうですよ。シギさん困ってるじゃないですか。」
若干引いていたシギを助けたのはココロだった。
「そうだぞ、人の過去は余り詮索してはいけないと思うぞ。」
『え～！』
２人をたしなめるのはクーだ。２人の煽りに慣れている。
「……お前のアイルー達はいつもああなのか？」
「基本家に人が来ないから、クー以外暇なんだ。」
そんなニートの家の騒動はまだ続く。

8話　食事風景（後書き）

こんな感じかと。
予告するが騒動は続きます

ニート「何するきだよ……。」

風呂。

ニート「いや、ちょっとm「待たん！」オイ！」

9話　風呂（前書き）

え～更新が遅れていたのは、ゲームをやっていたからです。

「謝れ！読者と俺達に謝れ！」

読者の皆様！ごめんなさい！

「俺達は！？」

9話　風呂

～改装された家の風呂場～

「……広すぎるだろ。」

どっかの銭湯位の広さであり、湯船も色々あった。
浅い湯船から深い湯船、果てはどういう原理なのか泡が勢いよく出てる風呂もあった。
……あえてスルーしてください。
ニートは肩までつかる風呂に入り、今日の疲れを癒す。
そのとき脱衣所から声が聞こえた。

『ダンナさん、湯加減はどうですかにゃ？』

声の人物はチャイムだった。

「ああ、いい湯だぞ。」
『それはよかったにゃ。』
「しかし大変だったろ、人の姿とはいえこの広さを洗うのは。」
『いえ、ダンナさんが命がけでクエストに出てるんですにゃ、ボク達にとってこれ位できにゃきゃ割りに合わないでしょう？』

……ニートは命を賭けるのは自分のため、アイルーのため、村のためだと考えている。しかし、割りに合う合わないと考えてはいない。

「俺は損得でハンターをやっていないし、一応恩があるんだよ。お前等を路頭に迷わせる気も無いしな。」
『ダンナさん……。』

「だからよ、あんまり気にすんなよ。俺達は運命共同体って奴さ。まあ嫌ならいいんだg『嫌だなんてとんでもにゃい！ボク達はダンナさんに雇われ、そしてダンナさんに出会えて感謝してるんですにゃ！嫌じゃにゃいです！』そ、そうか。」

気圧（けお）されるニート。古株のチャイムがここまで感情を露にするのは初めてで、驚いていた。

『あ……、ごめんなさいにゃ。』

「いや、俺は幸せだと今感じたよ。」

『幸せ、ですにゃ？』

「ああ、こんなにもダンナ思いのアイルーがいて俺は幸せ者だよ。ありがとう。」

『ダ、ダンナさん。』

こうして今日が終わる。

……と、ここで終わればいい話だが、現実は無常なワケで。

『そ、そんな事言われたらボク達、ボク達、我慢できにゃいにゃー！』

「え？」

ガララー！　スライド式のドアから全アイルー＋シギが入ってきた。

……全裸で。

お忘れだと思うが彼女達は擬人化しているので、それはそれはプロポーション抜群。

ニートは光速で振り返り、見ないよう意識した。

「ななななな、なんで全裸なんだ！というかチャイムだけじゃなかったのか！つかシギまでなんなんだ。」

「知りたいか？」
「是が非でも！」
「なに、いつもどんな考えで過ごしているのか気になってな、アイルー達に頼んだんだが感極まって暴走とは恐れ入った。まあ私ですら我慢できないんだ、責任はとってくれるよな。」

ある意味死刑宣告。

「ダンナさんー！」
「ダ、ダンナさん！」
「ダンナ！」
「……ダンナ……！」
「ダンナさん！ダンナさん！！ダンナさん！！！」
「ダンナ様！」
「だああ！来るなー！」
「ニート、逃さんぞ！」

こうして夜が更けていく。
多分逃げ切れたと思う。

9話　風呂（後書き）

実は昨日書く予定だったんですが、手違いで消してしまい、ふて腐れてました。

１０話　風呂の延長（前書き）

実は作者のＨＲがＧ級になりました。
「まさかゲームしていたのは……。」
まあ、そういうこと。でも困ったな。
「？」
いや、お前のＨＲは俺の現在のＨＲと同じだったんだよ。
「……どーすんだよ？俺は緊急クエストやってないぞ。」
いやこれ、擬人化物だから。増やしてからね。一応、下位の村長クエストの最後ができたばかりだからね。
「早いだろ。」
あれから１ヶ月たった事にしたから。
「駄目だこの作者…、早く何とかしないと。」

１０話　風呂の延長

さて、あの“風呂事件”の結末を書いておこう。簡潔に。

１　ニート、風呂から緊急回避を繰り返しながら部屋に戻り、ベッドイン

２　草木も眠る丑三つ時、ノック音に気づき、開けると顔が朱色に染まったシギが居た

３　シギ、ニートの耳元でこう囁く「責任は取ってもらうと言ったハズだぞ？」

４　ニート、ポッケ村に来た理由が違う事を追及しかし「確かに、まだ貴様を仲間と認めた訳では無い、がモンスターの本能なのかどうか分からんが雌というのは強くそして優しい雄を求める事があるんだ。」

５　結局、ニートはシギの甘い体臭を嗅いでいたので、まさに漲っている（みなぎ）状態だった。

６　「だがそれは本能のせいだろ！？」「違う、いくら本能でも嫌な相手にはしたいとは思わない。」

７　結果　甘い声が部屋に響いた。

蛇足　朝、甘い一戦をやり終えた部屋にアイルー達がそれを目撃し、ニートに（性的な意味）で襲い掛かったのは言うまでも無い。

１０話　風呂の延長（後書き）

あ、書き忘れましたが“たぶん”ギリギリ１７禁です。妄想しといてください。
結局逃げられなかったみたいですが。

１１話　新たな同居人（犠牲者？）　準備（前書き）

「……俺の純潔が……。」
女々しいな。
「誰のせいだ！誰の！」
据え膳くらい食い散らさん！って言うくらいな勢いだったじゃん。
「……完全に全員我慢をしなくなったよ……。逃げてるがな！」
発情期にならんと子はできんぞ。
「いやそれでもさ。」
頑張れ。
「改善する気ないのか……。」

１１話　新たな同居人（犠牲者？）　準備

あれから1ヶ月たった。
シギはハンターになった。ニートが「同属を殺すかもしれんぞ。」と言うとシギは「覚悟の上だ。それにお前達人間も同属同士で殺しあってるだろうが。」の反論があった。
シギはＨＲ６にまで上がり、ニートは7になる為の緊急クエストが出ていた。
蟹では無く、飛竜種のアカムトルムだ。
ニートは下手したら死ぬと考え、修行・素材集めに勤しんでいる。
因みにシギの装備はオデッセイ・ギアノスＵシリーズだ。

「よー居るか？」

シャーが家に訪問してきた。シギが奥から現れる。

「……貴様か。」
「そだよ。んでニート居る？」
「ああ、呼んで来る。」

アイルーに案内され応接室で待つこと5分、ニートが来た。
「……何のようだ？」
「依頼。」
「擬人化の？」
「うん、報酬は２００００ｚ出すよ。」
「それでいいが、目標は？」
「ガウシカ・ポポ・ケルビ・アプトノス・アプケロス」
「……お前は俺に死ねと？」
「何で？」

「いや、なんでもない。」
「今すぐ出発してね。」
「何でだ？」
「今の五匹、密輸されてるから。早くしないと不味いよ。この村のハンターじゃない奴等が街に運んだら、ギルドに絞められるよ。」
「……場所は？」
「密林。あとこれ“擬人化草”だよ。食べさせてね。」

ニートはすぐに装備を整え、走って出て行った。
シギが応接室に入ってきた。
「……お前は何がやりたいんだ？」
「言ったはずだよ。」

こんなやり取り。

１１話　新たな同居人（犠牲者？）　準備（後書き）

さて、一気に新キャラ出す事にしたが被るかもしんない。

１２話　新たな同居人（犠牲者？）　始めと終わりの平行線（前書き）

久しぶり。
「……誰？」
作者の牙練です。
「何でまた？」
いやね、ここ最近モンハンやって無いから更新してなかった。
「お前な……。まあ良い、何で書くことに？」
総合評価が１００超えてたから、まさか読んでくれてるとは。
「……で、どうするんだ？これから。」
二足のわらじよりキツイ。だけど、誓ったんだ。もう削除はしないって。
「そうか……、頑張れよ。」
ああ。

12話　新たな同居人（犠牲者？）　始めと終わりの平行線

〜密林〜

ガラガラガラッ！

密林に馬車の音が響く。
1つでは無く、複数の馬車が密林を走り街を目指していた。
その馬車は人を運ぶ馬車では無く、生き物を運ぶ馬車だった。

〜馬車内〜
1人のハンターらしい男が太っている男に話しかける。
「依頼人さんよ、こんなに簡単なら俺らはいらないんじゃないかい？」
「なぁに、念には念を入れねばならん。捕獲の事実を作るにはハンターが居ればすんなりうまく良く、即ち利害は一致しているのだよ。理解出来たかね？名も知らぬハンター。」
男は不気味に「ぐふふ。」と笑った。
対するハンターは、納得がいかない・気が進まないといった感情を示すが、直ぐに無表情になった。
「……まぁ、いい稼ぎではありますがね。」
「そうだとも。これからも頼むぞ。」
そう言われた男は、あえて流した。
（この依頼は余り受けたくは無いが……、“団”の存続の為には仕方無い。しかし、この男の性癖はおかしい……、女に反応しないとはな……。）
この太った男性は特殊だった。
何故かモンスターにしか反応しない体質だった。
そんな考えをしているハンターは外の雨音を聞いていた。

〜密林〜
ニートは落とし穴を5つセットしていた。
落ちた瞬間、捕まったモンスターは怪我しないのだろうか？
「……本当に大丈夫かよ？アイツの情報は？」
シャーがある情報を配達屋のアイルーに頼み、ニートに届けさせた。
ニートはそれを受け取り、読んだのだ。
そして落とし穴の設置が完了した。
「5つの輸送型馬車の内の4つはモンスターを乗せてはいない。また、乗せている馬車の先頭を走っている、か……。」
取りあえず、ニートは待つ。

…数分後…

馬車がやって来た。
先頭の馬車が罠に掛る。

ズボーン！

作戦の1つは成功した。
「仕上げいくか。」
草木に隠れていたニートは直ぐに輸送車の方へ向かうが、馬車内からナイフが飛んでくる。

カキィンッ！

ニートは双剣で弾く。
「……少しはやるみたいだな。」
そう言いながら馬車の中からハンターが出てくる。
「アンタは？」

「しがないハンターだ。そして団長だ。」
「団長？」
「なに、荒くれ共の集まりさ。集団で依頼を受けているのさ。」
男は下らないと感じる顔をしていた。
「そうか、悪いがこちらも依頼だ。押し通る。」
「ぬかせ小僧！」
男は大剣使いだった。
しかし、ニートは大剣を“受け流した”。
結果、大剣は標的を失い地に落ちた。
「終わりだな。」
ニートは喉元に双剣を突きつけた。
「ちっ……。」
こうしてニートは男と太った男性を縛り、輸送車に向かった。
この時、縛られたハンターの男は隠していたナイフを使い脱出、そして逃亡した。

〜輸送車内〜
この中に入った途端、威嚇の声が上げられた。
「何と言うか……、凄まじいな。」
理由は簡単だった。
ガウシカとアプトノスとアプケロスが前に出て威嚇し、ポポとケルビを護っていたのだ。
「仕方ないか。取りあえず……、ほら。」
ニートは擬人化草を中央に位置する床に置き、輸送車内を出た。
しばらくすると、草を食べる音が聞こえた。
余程腹が減っていたらしい。
そして、虹色の光が車内から漏れた。
「ふう、ミッション終了。」
中に入ると2人の少女・3人の美女が眠っていた。
「……絶対厳しくなる。」

財政では無く、精神的に。
馬車が来る前にそう思ったニートであった。

１２話　新たな同居人（犠牲者？）　始めと終わりの平行線（後書き）

読者の皆様、お久しぶりです。
上記の通り、完全に放置でした。
皆様、すいませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4584l/

モンハンＰ２Ｇ～駆け出しハンターの擬人化伝

2011年3月11日10時08分発行